

大阪市天王寺区にある「視聴覚二重障害者福祉センターすまいる」で事務局長を務めている。同センターは目と耳の両方に障害がある盲ろう者のための施設。誰かと話すことさえ難しい、盲ろう者たちにとっての貴重な交流の場だ。パソコンの講座が開かれたり、販売用の毛糸の小物作りなども行われている。

盲ろう者のこうした活動には、通訳と移動などを手助けする、通訳・介助者が欠かせない。聴覚障害がある石塚由美子さんもその一人。盲ろう者と話すときは、自分の手を盲ろう者に握らせて手話を触って読み取ってもらう。

# 支える人

石塚 由美子さん(58)

## 盲ろう者の通訳

午前9時半すぎ。そろそろ利用者が「すまいる」に集まってくる。「石塚です。おはようございますいます」。一人一人の手を取って、手話であいさつをする。相手の表情や態度にいつもと違ったところがないかも気にする。「会話のタイミングをつかむのが難しいことから、自分の意見や考えを言い出せない盲ろう者は多い」と言う。孤独感や疎外感を大きくさせないため、ささいな変化でも気になったことは後回しにしないで本人に聞く。できる限り利用者のそばにいられるよう、事務仕事は利用者が帰った後などにまとめて済ませる。盲ろう者とのコミュニケーションに手間取っている通訳者のサポートをしたり、相談に乗ったりと、「支える人を支えるのも事務局長として大事な役割」と語る。

盲ろう者に初めて出会ったのは約30年前。お菓子作りを体験する聴覚障害者向けの講座で講師をしたときのこと。1人だけ、手話で話し掛けても反応を示さない男性がいた。作っているとこをよく見てもらおうと参加者に自分の近くに集まるように伝えても、その男性は席から立



触手話通訳をする石塚さん  
—すまいる事務所—

ち上がるうとしなかった。キー作りを続けながらも、何をしにきたのかと、つい男性の姿を目で追っていた。すると男性は隣に座っていた別の参加者に手話で「タバコを吸いたい」と伝えた。「なんだ、手話を使えるんじゃないか」。呆気に取られていると、その2人は手をつないで部屋を出て行った。2人は部屋に戻ってきてからも向かい合い、手を握り合っていた。石塚さんは「正直、面食らいました」と当時の驚きを語った。その男性に話しかけた石塚さんは、彼から目が見えないことを手話で伝えられて、再び驚いた。「目も耳も不自由なヘレン・ケラーのような人が目の前にいる」耳が聞こえる人たちの話の輪に入らずに、分からなくても

# 簡潔に要約するセンスも

りあえず分かったふりをして自分の姿を思い出した。「空しさに気付いてくれる人がいたら」と思ってきたからこそ、この盲ろうの男性に親しみを感じた。

このことがきっかけで盲ろう者らでつくる「大阪盲ろう者友の会」の活動にボランティアとして関わるようになった。その後、同会のスタッフとして働いた後、「すまいる」の立ち上げに参加。そのまま「すまいる」で働くことになった。石塚さんにとって盲ろう者は「聞こえない自分が助けられるばかりの存在ではないと気付かせてくれた人」だ。

通訳では、言葉や文字以外にもさまざまな情報を伝える。理想は「見えるもの全て」。誰が周りにいるのかや、その場の雰囲気、別の人が会話をしているのかどうかなども伝える。触って手話を読み取るには時間がかかるため、内容をより簡潔に要約するセンスも求められる。「もっとうまく伝えられたらと模索する。やりがいのある仕事」と笑顔を見せた。【平井俊行】

【プロフィール】ろう学校を卒業後、地域の私立高校を経て、花園大(京都)を卒業。一女一男の母。

## 近頃王は遠聞

「音訳誕生60年」という3回企画を複数の記者で連載した。音訳ボランティアグループに話を聞き、一つの録音図書を作るのに、準備の下調べから始まり、実際の録音、読み落としがないかなどの校正も含め、たくさんの時間と膨大なエネルギーが費やされていることを知った。一方で、録音図書を借りた人からは、「少しだけ聞いて返却した」という残念な話も聞いた。

この間、「いい音訳」とはどんなものか、ずっと考えていた。心地良い声質などは人それぞれ。それも考慮した上で、正しいア

## 利用者に聞いてみよう

クセントやイントネーションはもちろん、声に出して図書の内容を利用者に届けるといふ音訳者の思いが大切なのではないか、と私は感じた。ぜひ、身の回りの視覚障害者に感想を聞いてみてほしい。

点毎に来て4カ月が過ぎた。記事は自己満足になっていないか。読者が必要な内容が載っているのか。取材の先々で聞いている。遠慮があるのか、面と向かって厳しいことはなかなか言われない。でも、不満があるなら言っしてほしい。そうすることで記者も育つから。

【山縣章子】